

これは経営にも共通することで、自分の利益ではなく、自分に関わる他者の利益を第一に考えることが大切です。ここではお寺の活動を振り返り、経営と関わる視点を提供できればと思います。

石碑にみる飲食店成功の理由

久保山光明寺には、面白い石碑が二つあります。一つにはウシが、もう一つにはニワトリやウナギが彫られています。

ウシが彫られた石碑は、横浜開港後に牛鍋が大流行したことにちなみます。そのとき牛鍋店が大繁盛しましたが、他の飲食店から妬まれてしまいます。さらには「牛を食べると良くないことが起る」という噂まで流れはじめました。牛鍋店の店主たちは「これはいけない」と思い、光明寺にウシの供養碑を建てて、その噂の火消しをしたそうです。



ウシの彫刻が目を引き「普濟無窮碑」

これは新しい食文化を根づかせようと努力した当時の人たちが、既存勢力の反対にうまく対応した事例と考えられます。自身が扱う食材をしっかり供養し、それを石碑という形として残し、広く知らせることで、仕事に対する安心感を得たのでしょう。

現在は企業に社会貢献が求められ、また買い手もエシカル消費※(倫理的な消費)を意識します。ウシの供養碑を建てたことは、自分たちがただウシを犠牲にしているのではなく、しっかりと供養していることを世に示す一つの社会貢献活動であり、消費者の安心を確保することにもつながるものです。これが反対勢力への効果的な対応策となり、横浜から牛鍋という食文化が発信されることとなりました。

※地域の活性化や雇用などを含む、人・社会・地域・環境に配慮した消費行動のこと(消費者庁 HP より)

利益を忘れる時間をもたらしもの

もう一つの石碑は、光明寺の檀信徒の鳥肉店やうなぎ屋、鮮魚店などが、商品となる生きものの慰霊のために建立したものです。今でも店主たちが集ってニワトリやウナギ、魚のための法要が行われ



「食鳥川魚慰霊碑」にはウナギが彫られている

ています。明治時代に行われたウシの供養の志は、形を変えて今日までしっかりと残っています。この法要のとき、私は「二つの命に感謝して商売をすること」「商売をしっかりと営むことは一つの供養であること」をお伝えしています。

二つの命とは「商品となる動物たちの命」と「これまでお店に関わってきた方々の命」です。飲食店は商品となる動物の命と、そのお店に関わってきた人々の命の上に成り立っています。食料として私たちの糧になる命を大切に扱い、お店を立ち上げた今は亡き方々の思いを大事にすることは、良い仕事につながります。そして誇りを持って自分の仕事をすることが、二つの命への供養となります。

今年(2022年)は参加者の方から「年に一回法要をやると、何か身が引き締まります」と感想を頂きました。職場を離れ、心を供養や感謝の念で満たすことは、仕事に対するモチベーションを上げる一助となります。より良い仕事をするためには、直接的な利益を忘れる時間を持つことが必要です。

仏教は自由楽しく生きるための教えです。ストレスが大きい方、不安や苛立ちを感じやすい方にこそ、仏教は役立ちます。仏さまの教えを参考にして、読者の皆さまがより楽しく仕事をするのであれば、幸いです。(久保山光明寺住職 石田一裕)

さらに詳しい記事が読める
ハマ街ビト番外編は
こちらから→

